

関連企画

被爆2世を生きる 平野伸人の半生(1)

2020/06/29 掲載

【衝撃】 同級生が白血病死

5月末、長崎市内。核兵器廃絶の署名を国連機関へ届ける高校生平和大使の選考会に続き、高校生1万人署名活動実行委員会の集会が開かれた。新型コロナウイルスの影響で休止していた署名集めを7月5日に再開することを確認した。

「困難を乗り越え、歴史をつないでほしい。とにかく粘り強いこう」。平野伸人(のぶと)(73)＝長崎市愛宕3丁目＝が約40人の高校生にハツパを掛けた。平和大使は本年度の新メンバーで23代目。署名を集める実行委も発足から20年目に入った。被爆地長崎から生まれた若者らの活動を創生期から支える“生みの親”だ。被爆2世で元小学校教諭。在韓被爆者支援や数々の平和運動を仕掛けてきた。原点は高校時代にさかのぼる。



1963年の出来事だった。県立長崎南高2年の時、同級生が学校でバスケットボール中に目まいと頭痛を訴えた。診断は急性白血病。彼もまた被爆2世だった。「当時、根本治療はなく、輸血で延命するしかなかった」。生徒会長の平野は校内で献血を呼び掛けて回った。

病院に見舞った同級生の姿に衝撃を受けた。「手足は痩せ細り、おなかは膨れ、言葉も発せなくなっていた」。手を握ると、彼の目は「生きたい」と訴えているようだった。命のともしびが消えたのはその数日後だった。

放射線被害の遺伝的な影響は今も科学的に解明されていないが、当時、新聞は2世の白血病を取り上げていた。同級生の家族はやがて引っ越した。「息子が原爆の影響で死んだとなれば、そのきょうだいも差別に遭うと恐れていたと思う」。同級生の死は2世という自らの境遇を初めて意識するきっかけとなった。

時を経て99年。平野が会長を務めていた全国被爆二世団体連絡協議会は、放射線影響研究所(放影研、広島市・長崎市)が新たに計画した2世への健康調査を受け入れることで合意した。被爆者には被爆者援護法が適用され、医療費や健康管理手当などが支給される。2世も被爆者と同様、原爆による健康不安を抱えているとして、全国被爆二世協は国に同法適用を訴えているが、国の対策は年に1回の健康診断だけ。全国にどの程度の2世がいるのか、その数も把握されていない。

調査への協力は遺伝的影響を調べ、国の援護施策につなげたいとの思いからだ。放影研の遺伝的影響調査は今も続く。

2017年には遺伝の恐れがあるのに援護を怠っているとして、2世らが国に慰謝料を求める集団訴訟を長崎地裁などに起こし、係争中。「実感として遺伝はあると思う。可能性を過小評価す

べきではない」。原告に名を連ねる平野はこう訴える。(文中敬称略)

◇

「被爆者なき時代」が近づく中、被爆2世として長崎の平和運動を長年率いてきた平野伸人さんの半生を通して、原爆を巡る諸課題や次世代継承を考える。



高校生1万人署名活動実行委員会の集会で、粘り強い活動と呼び掛ける平野さん(左)＝5月31日、長崎市大黒町、長崎自治労会館

被爆2世を生きる 平野伸人の半生(2)

2020/06/29 掲載

【記憶】 祖母の背中のガラス

梅雨入り翌日の6月12日、平野伸人(73)の姿は、母良枝(101)が暮らす恵の丘長崎原爆ホーム(長崎市)にあった。「長生きしてね」。いたわる平野に「あなたも頑張ってるね」と穏やかな笑みを返す。息子の平和活動にも「できることをすればいい」と昔と変わらぬ理解を示した。

1945年8月9日。良枝は爆心地から3・6キロの梅香崎町の自宅で被爆した。良枝と、平野の姉で当時2歳だった彌英子は無事だったが、平野の祖母ミヨは背中一面に爆風で砕け散った窓ガラスが突き刺さった。

姉は空襲警報が鳴ればそうしていたように、おんぶひもを手で祖母にしがみついた。祖母は気丈に背負い、3人で寺町の墓地へ避難。母は祖母の背中のガラスを箸で一つ一つ取り除いていた。姉は被爆後、光を恐れ、押し入れの中で食事を取ることもあった。

旧満州(今の中国東北部)に出征していた父英二＝96年に79歳で死去＝は間もなく長崎市に戻り、家庭裁判所の調査官となる。46年12月、平野が誕生。「戦後の焼け野原に生まれた家族。みんなかわいがってくれた」

十人町の自宅から大橋地区の親戚宅によく行き、廃虚の浦上天主堂で鬼ごっこをしたり、浦上川で被爆瓦を拾ったりした。市立佐古小(今の仁田佐古小)時代は被爆で傾いた校舎の廊下でビー玉を転がして遊んだ。

長崎大付属中から県立長崎南高へ進学。生徒会長となり、フォークダンス大会を企画したり、生徒会新聞を増やす資金調達のため広告取りをしたりした。生徒会誌に『『不言実行』もよいが生徒会活動はこれではだめ、よく言いよく実行する。モットーは『有言実行』』と寄稿。行動派の一端をのぞかせる。

被爆2世だった同級生が白血病に倒れた翌年、祖母ががんでこの世を去った。荼毘(だび)に付した時の記憶が脳裏に焼きついている。骨を拾う際、「きらっと光った」。被爆後約20年も体内に残ったガラスだったのだろう。母は「おばあちゃんごめんね」と泣いた。

被爆者で、東京電力福島第1原発事故の被災地支援などで行動を共にした「長崎の証言の会」元代表委員、廣瀬方人＝2016年に85歳で死去＝は高校時代の恩師だ。当時から「自分には使命がある」と話し、被爆者運動に熱心だった。祖母の背中のガラスの記憶。原爆の存在は平野の意識に静かに溶け込んでいった。(文中敬称略)



母良枝さん(右)の手を取る平野さん＝6月12日、長崎市三ツ山町、恵の丘長崎原爆ホーム

被爆2世を生きる 平野伸人の半生(3)

2020/06/30 掲載

【弱者】 支援活動に生きがい

学生運動が盛んだった1965年、平野伸人(73)は新聞記者を目指し早稲田大教育学部社会科学科へ進む。学内で間もなく学費値上げなどを巡る「150日間闘争」が始まった。だが、平野自身は集会などに参加はするものの、運動に傾倒するわけでもなかった。

悶々(もんもん)とする日々。変化をもたらしたのは、知人に誘われて入った知的障害者の支援サークルだった。大学2年時には就学前の知的障害児や親と交流するサークル「あすなる会」の創設メンバーとなる。

当時、知的障害児が幼稚園に入れず、母親と家に閉じこもっていることが問題になっていた。会は定期的に母子を集め、子ども同士、親同士の交流の場をつくった。「これだ」。目標を見失っていた平野は障害児施設を運営しようと、先進地ドイツへ視察に行くほどのめり込んだ。会に誘った元NHK職員の奥田賢一(73)＝京都市＝は、当時の平野を「弱い立場の人を助けようと一生懸命。子どもと遊ぶのも上手だった」と振り返る。

大学卒業後、「食うため」に千葉県内の鉄鋼商社に就職、5年間勤めた。高校の後輩で、都内の別の大学から会に参加していた啓子(71)と結ばれ、子どもをもうけたのもこのころだ。そして、小学校教諭になっていた会の仲間の影響で、同県の公立小教諭に転身した。

「よく働いた。会社員時代から体重が10キロ減った」。親が経営する会社が厳しくなり、修学旅行に行けなくなりそうな児童がいたら、ポケットマネーで連れて行った。自衛官の保護者が多い土地柄。保護者との会合では、安全保障問題などを語り合った。

79年、長崎市に帰郷。人生の大きな転機となる。市立福田小を経て84年、西彼時津町立時津東小に転勤。ある日、児童が近くの県立盲学校の子どもに差別的な言葉を投げかけ、石を投げたと聞いた。ショックだった。

「子どもに注意するだけでは駄目だ。理解し合わないといけない」。学校でそう訴え、「交流教育」を始める。子どもたちが互いに学校訪問し、一緒に運動や行事を楽しむ斬新な取り組み。活動は全国に知られ、視察が相次いだ。

平和教育についても、被爆者の先輩教諭たちの熱心さに「感化されていった」。あすなる会で培われた弱者や相互理解への意識。そのまなざしは、後に被爆者や被爆2世にも注がれる。(文中敬称略)



あすなろ会が開いたクリスマス会でサンタクロースに扮する平野さん(中央)=1967年12月(奥田さん提供)

被爆2世を生きる 平野伸人の半生(4)

2020/07/01 掲載

【運命】 教職員の会を組織化

「運命の被爆40年」。平野伸人(73)は1985年をこう表現する。既に被爆者の高齢化が指摘され、「被爆の実相や平和運動を引き継ぐのは被爆2世」という機運の高まりをひしひしと感じていた。

その年、被爆2世教職員による全国組織の設立を目指した会議が東京で開かれることになった。勤務していた西彼時津町立時津東小から同僚が参加予定だったが風邪をひき、代役が回ってきた。

高校時代、同じ2世の同級生を白血病で亡くした平野。東京では、放射線被害の遺伝の可能性を指摘する研究者の講演に動揺し、わが子にも影響が出ていないか不安に駆られた。熱心な広島や大阪の2世教職員とも交流し、2世運動に「使命感を感じた」。

早速、県内の2世教職員の掘り起こしに取り掛かる。若い教職員宛てに文書を1千通以上配り、結集を呼び掛けた。86年、集まった約20人で県被爆二世教職員の会を結成し、会長に就任した。

第1回の学習会では当時、長崎大経済学部長で後に原水爆禁止日本国民会議(原水禁)議長となる岩松繁俊(92)が講演。原爆は被害と日本の加害責任の両面から考える必要があると説かれ、「会の方向性に影響を受けた」。

会は親の被爆体験の聞き取りを開始した。平野が母に詳しく聞いたのもこのころだ。88年設立の全国被爆二世教職員の会でも会長に就き、2世の援護問題と被爆者運動の継承、平和教育の推進を活動の柱に据えた。同年には全国被爆二世団体連絡協議会も組織化される。

冷戦末期の80年代後半、世界で核実験が相次ぎ、長崎の被爆者は毎週のように座り込みをし、抗議の声を上げていた。ある日、平野は上五島に赴任していた小学校教諭で被爆者の山川剛(83)の存在をニュースで知る。山川は現地で独自に座り込みを始め、児童と一緒に風船にヒマワリの種と平和のメッセージを付けて飛ばす活動もしていた。「行動で平和をつくる発想とパワー」に刺激を受けた平野が長崎で座り込みに参加すると「若いので喜ばれた」。記者の質問に答えられるように核情勢を必死に勉強した。

若者の関心を高めようと、学校の枠を超えた「こども平和の集い」を始め、稲佐山で企画された音楽行事などに携わった。がむしゃらだった。「若き平和運動の旗手」と呼ぶマスコミも出てきた。(文中敬称略)



全国被爆二世教職員の会の結成大会で、会長となった平野さん(左奥から4人目)＝1988年、
広島市内(平野さん提供)

ピースサイト関連企画

被爆2世を生きる 平野伸人の半生(5)

2020/07/02 掲載

【洗礼】 日韓の差にショック

被爆50年の1995年、平野伸人(73)が会長を務めていた県被爆二世教職員の会などが韓国で企画したアジア初の原爆展は、現地で猛烈な抗議行動に遭う。惨状を伝える被爆写真に「原爆はひどい」との声もあったが、圧倒的に大きかったのが「日本の植民地支配がひどい」との反発だった。もっとも、日韓の認識の差を痛感したのはこれが初めてではない。

87年、大阪の被爆2世の呼び掛けで、平野らは韓国の被爆者や2世と交流する訪韓団を初めてつくった。約200人が集まった会場。団長の平野が「同じ被爆者や2世として核兵器をなくす運動をしよう」と呼び掛けると、会場から「『同じ』ではない」と異論が噴出、“洗礼”を受ける。

「在韓被爆者は日本の植民地支配下に労働力として海を渡り、原爆に遭った。帰国後も日本人のように援護を受けられず、苦しい生活を送った。『形成過程』が違うのだ」との指摘に、「目からうろこが落ちた」。

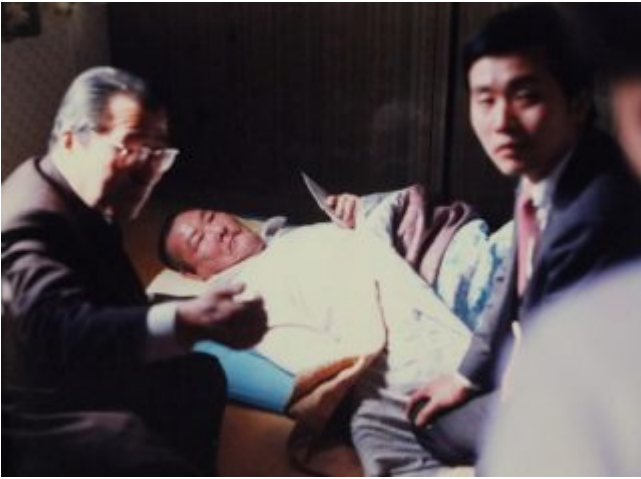
翌日、被爆者宅を訪問して回り、さらに衝撃を受ける。全身ケロイドで放置されたような人、やけどで手の指がくっついたままの人。「ひどい」。初めて目にする現実に関心が痛んだ。

当時、日本を出た被爆者は援護の対象外とする旧厚生省局長の「402号通達」があった。医療費や手当給付は受けられない。「夏に日本人が来て『かわいそう』と言うが、続けて支援する人はいない」。ある被爆者がつぶやいた。平野は誓う。「知った者の責任としてちゃんとやります」

長崎に戻り、さまざまな団体に在韓被爆者らの支援の必要性を説いた。だが、関心は薄く反応は芳しくない。平野は大阪に拠点を置く「韓国の原爆被害者を支援する市民の会」の活動にも加わった。ある日、韓国原爆被害者協会の会員約2500人のうち、長崎で被爆したのは79人と少ないことに気付く。

90年、長崎の教職員仲間らと現地調査に乗り出す。98年の16次調査までに500～600人の被爆者と会い、うち長崎で被爆した人は約200人を数えた。調査のたびに埋もれた被爆者が掘り起こされていった。

現地調査時、被爆者一人一人に「調査だけでは申し訳ない」と自腹でカンパした。長崎友愛病院(長崎市)の協力も得て、来日すれば援護を受けられる被爆者の渡航と入院治療を世話した。「砂漠に水」の運動は、やがて根本的な解決を目指す運動に変わっていく。(文中敬称略)



関連企画

被爆2世を生きる 平野伸人の半生(6)

2020/07/03 掲載

【開拓】 裁判による解決模索

「出張日記」と記された192ページの小さな手帳が、平野伸人(73)の手元に残る。書いたのは戦時中、三菱重工業長崎造船所に徴用され被爆した金順吉(キムスングル)＝1998年に75歳で死去＝。91年、県被爆二世教職員の会会長だった平野が在韓被爆者調査の際、「実態解明に役立ててほしい」と本人から受け取ったものだ。

日記に並んだ小さな崩し字の日本語。家庭裁判所調査官だった平野の父英二(故人)が読みやすい文字にしてくれた。そこには、金が徴用された45年1月以降、原爆投下の8月9日にか、空襲や朝鮮半島出身者の逃亡、給与未払いなどが事細かに記されていた。

日記を元に、金は未払い賃金の支払いや徴用、被爆に伴う慰謝料を三菱重工に求めたが、「らちが明かなかった」。92年、国と三菱重工を相手に長崎地裁に提訴。平野は後に「岡まさはる記念長崎平和資料館」(長崎市)を立ち上げる高實康稔＝2017年に77歳で死去＝らの協力を取り付け、訴訟を「支援する会」を結成した。1997年、地裁は徴用に絡む違法行為を認定したが、「(国が)旧憲法下で民法上の不法行為責任を負うことはない」として退け、最高裁で敗訴が確定。それでも平野は「裁判で解決する道を切り開いた」と意義を語る。

海外に住む被爆者の援護を巡っては、70年代、被爆者健康手帳の交付を日本側に求めた韓国人被爆者が勝訴。在外被爆者救済の道が開かれたものの、日本国外に出ると援護を打ち切るとする旧厚生省局長の「402号通達」が立ちはだかったままだった。

「被爆者はどこにいても被爆者だ」。金順吉裁判以降、長崎、広島、大阪で韓国やブラジル、米国などの在外被爆者の訴訟が相次ぎ、長崎関連の約20件で平野は支援に奔走。各地で勝訴を勝ち取り、402号通達廃止(2003年)、在外被爆者が手当を申請する時に義務付けた来日要件の撤廃(05年)など、制度のひずみが是正されていった。長年、平野を支える弁護士の龍田紘一郎(79)は「足で回って問題を掘り起こし、告発した」と評する。

ただ、高齢化した在外被爆者が判決前に亡くなることも多かった。裁判で敗訴しなければ重い腰を上げようとする被爆国の姿勢に平野は唇をかんだ。「歯がゆい。裁判は労力も金もかかるが、それしか道はなかった」(文中敬称略)



韓国人徴用工の「出張日記」(手前)と、それを書き写したノートを見比べる平野さん＝長崎市大黒町、平和活動支援センター

ピースサイト関連企画

被爆2世を生きる 平野伸人の半生(7)

2020/07/04 掲載

【保存】遺構の活用に奔走

爆心地に近い長崎市の平和公園。被爆50年に向け改修工事中だった1992年、地中から旧長崎刑務所浦上刑務支所の基礎や死刑場が姿を見せた。大型の被爆遺構出現にマスコミも大きく報じた。

長崎原爆戦災誌などによると被爆時、刑務支所と官舎にいた収容者や職員、家族ら134人は全員死亡。中国から強制連行され県内の炭鉱で働いていた約千人のうち約30人に加え、少なくとも十数人の朝鮮半島出身者が含まれていた。

戦後、長崎では復興の下に被爆遺構が取り壊されていった。80年代後半には市立の銭座小、山里小、淵中などの被爆校舎が建て替えに伴い、相次いで姿を消した。そうした中での遺構出現。県被爆二世教職員の会会長だった平野伸人(73)は保存運動の先頭に立ったが、「死刑場は平和公園のイメージにそぐわない」との地元の反対もあり、当時の市長、本島等＝2014年に92歳で死去＝は基礎の一部保存にとどめた。

全面保存は実現しなかったが、事態は別の展開を見せる。NBC長崎放送記者だった関口達夫(69)が同支所の収容者ら長崎に強制連行された中国人約200人の本籍を調べて手紙を送ると、遺族や生存者計12人から返信があった。平野は現地取材に同行、強制連行の実態に触れた。

平野らも98年、約400人に手紙を出し、60人以上が返信。本格的に現地調査を始めたところ、「長崎で爆死したことさえ知らない遺族が多かった」。

2003年、県内の炭鉱で働かされた中国人元労働者らが、炭鉱を運営していた三菱マテリアル(旧三菱鉱業)や日本政府などに慰謝料や謝罪を求め、長崎地裁に提訴。09年の最高裁で敗訴が確定した後も平野は同社と交渉を重ね、16年の和解にこぎつけた。

本島とは遺構保存を巡り対立したが、共に在韓被爆者を訪ねたのを機に親交を深めた。日本の戦争責任に意識的だった本島。市長退任後には、中国人強制連行訴訟の「支援する会」会長に就いてもらい、08年に平和公園に追悼碑を建立した際も尽力してもらった。

平野は同支所問題を機に、防空壕(ごう)など被爆遺構の保存運動も活発化させる。「最後の大型遺構」とみる旧県庁第3別館(江戸町)の存廃は未定だが「原爆関連の資料館として使えないか」と考える。「被爆者なき後、被爆の実相を伝えるのは遺構」。そう力を込め、続けた。「そして若者も」(文中敬称略)



浦上刑務支所の死刑場跡に入り、市民向けに遺構を説明する平野さん(下)＝1992年、長崎市松山町、平和公園(平野さん提供)

被爆2世を生きる 平野伸人の半生(8)

2020/07/06 掲載

【自発】高校生が表舞台へ

「いつも同じ顔触れ。知らない人がいたら警戒するほどだった」。東西冷戦のあおりで原水爆禁止運動が分裂する中、被爆医師の秋月辰一郎＝2005年に89歳で死去＝らが団結を呼び掛け1989年に始まった「ながさき平和大会」。平野伸人(73)は、その将来に不安を抱えていた。

県被爆二世教職員の会会長だった平野は同大会の事務局長に起用され、92年に秋月が病に倒れた後も大会を切り盛りした。だが、秋月が望む若者の参加は「ほとんどなかった」。

98年5月にインド、パキスタンが核実験を強行。核を巡る情勢は緊迫の度合いを増していく。同大会関係者の間で被爆者をニューヨークの国連本部へ送る案が出た際、平野の頭に秋月の声がよぎった。「若い人を」。こうして生まれたのが高校生平和大使だった。

公募で選んだ2人が同年10月、国連本部で関係者を前に英語で被爆地の思いを訴えた。当初、同大会内部では「民間の範疇(はんちゆう)を超えている」「行政と協力すべきだ」と批判もあったが、平野は「権力におもねれば言いたいことも言えなくなる」と市民運動にこだわり、派遣のため自腹も切った。

以来、平和大使派遣は恒例化。2000年からは国連側の助言で訪問先を軍縮会議の舞台、ジュネーブの国連欧州本部に移す。

高校生の輪は自発的に広がる。平和大使選考に落ちた高校生の中から「何かしたい」との声が上がり、01年、平和大使が国連欧州本部に届ける署名を集める高校生1万人署名活動実行委員会が始動した。

ただ、「知名度がある今と違い、当初、署名は思うように増えなかった」。活水高2年時に創設メンバーとなった被爆3世の藤本絵梨華(36)は振り返る。

市民の反応は鈍く、被爆者からさえ「勉強しろ」と叱られた。公立校などでは「政治活動に当たる」などと校内での活動が制限された。それでもめげずに、学校のバッグに署名道具を忍ばせ、帰りのバス停で高校生を見つけては署名をお願いしたりした。その年、最終的に数十人が約2万8千筆を集めた。国連欧州本部へ無事届くと「世界は変わるのでは」と感動した。今も署名活動をサポートし続けている。

平野は「若者は平和運動に関心がないわけではない。大切なのはきっかけと目的意識だ」と言う。かつて自身も被爆2世団体との関わりから平和運動に目覚めたように。(文中敬称略)



高校生1万人署名活動が始まって間もないころの平野さん(中央手前)＝2001年7月、長崎市内(平野さん提供)

ピースサイト関連企画

被爆2世を生きる 平野伸人の半生(9)

2020/07/08 掲載

1998年に被爆地長崎で誕生した高校生平和大使は2005年、全国公募に拡大する。13年、被爆の実相を伝える若者に委嘱する外務省の「ユース非核特使」第1号に選ばれ、14～16年には国連軍縮会議で演説の場も設けられた。「微力だけど無力じゃない」の合言葉と共に、国内外で認知度を高めていく。

「ノーベル平和賞にノミネートしてはどうか」。平和大使を派遣する市民団体の共同代表を務める平野伸人(73)は、何度か国連関係者からこう勧められた。「まさか」と思ったが、17年に核兵器禁止条約の成立に貢献した非政府組織(NGO)の核兵器廃絶国際キャンペーンが同賞を受賞したことも刺激となった。

平和賞候補の推薦を得るため国会議員50人に連絡を取り、活動を紹介。25人の推薦を得て、18年にノーベル賞委員会に申請し、正式候補となった。受賞には至らなかったが、平野は「認知度は相当上がった。さらに運動が発展すればいい」と前を向く。平和大使は今年も候補に推薦された。

被爆から75年。多くの被爆者が亡くなり、被爆2世といえども高齢化が進む。平和大使の支援組織づくりや、選考会のため国内各地を飛び回っている平野も古希を超えた。今年から支援者らと役割分担や体制強化について意見交換を進めている。運動を担う人材育成は不可欠だ。「自分がいなくなった後が課題」と言う平野だが、一方で「あまり心配していない」とどこか楽観的でもある。

平和大使は誕生から23年目、高校生1万人署名活動実行委員会は活動開始から20年目。これまで全国約3千人の高校生に関わり、今や若者の平和活動は珍しいものでもなくなった。「たくさんの種をまいた。20～30粒は芽が出ているのでは」

長崎市立銭座小時代の教え子で第12代高校生平和大使だった会社員、林田光弘(28)＝川崎市＝は、在外被爆者支援などにも奔走する平野を間近に見て「社会は変えられる」と確信した一人だ。

15～16年に若者団体「SEALDs(シールズ)」のメンバーとして安全保障関連法に反対。現在は日本など各国に核兵器禁止条約締結などを求める「ヒバクシャ国際署名」の事務局で、キャンペーンリーダーとして被爆者と行動を共にする。「経験を生かし、長崎で若い世代の活動を支援できないか」。来年、古里長崎に拠点を移そうと考えている。

(文中敬称略)

【育成】 3000粒の「種」まいた



高校生1万人署名活動に加わった中学時代の林田さん(左)と平野さん(中央)＝2007年、長崎市内(平野さん提供)

ピースサイト関連企画

被爆2世を生きる 平野伸人の半生(10完)

2020/07/09 掲載

6月9日正午すぎ、強い日差しが照り付ける長崎市の平和公園であった恒例の「反核9の日座り込み」に被爆者ら約90人が集まった。「みんな年を取っているが、もう一度闘う」。集団訴訟の準備状況を報告した「被爆体験者」の男性が決意を示すと、平野伸人(73)も「思いを受け止めて応援しよう」と後押しした。

国が定める長崎原爆の被爆地域(爆心地から南北12キロ、東西7キロ)の外で原爆に遭ったため、被爆者とは認められず「被爆体験者」と呼ばれる人たちがいる。被爆地域は原爆投下当時の同市の行政区域を基に設定され、いびつな形だ。このため、爆心地から同じ半径12キロ以内でも援護に差が生じ、被爆体験者には今も被爆者援護法が適用されていない。

2007年、被爆体験者が市などに被爆者健康手帳の交付などを求めた集団訴訟を長崎地裁に起こす際、原告の岩永千代子(84)＝布巻町＝らは平野に支援を依頼した。第1陣、2陣訴訟はいずれも昨年までに最高裁で敗訴が確定したが、再提訴など動きは続く。高齢化の中、提訴からこれまでに、少なからぬ原告が帰らぬ人となった。「いつまで(私たちの)体がもつだろうか」。岩永の表情に焦りの色がにじむ。

高校時代、白血病に倒れた同じ被爆2世の同級生の死をきっかけに原爆を意識し、1985年に2世教職員の活動に関わって以降、被爆地長崎から数々の平和運動を仕掛けてきた平野。それは、被爆者でなくても「長崎の証言の会」の創設や在外被爆者問題に傾注した鎌田定夫＝2002年に72歳で死去＝ら、先人の姿に学びながらの取り組みだった。

その活力源は何なのか。平野は「困っている人がいたら助けたいし、頼られるのはうれしい。自分を体現できる場でもある」と言う。「やると決めたら最後まで」という母良枝(101)の教えも挙げる。

被爆地や被爆国に積み残されたさまざまな課題、そして核廃絶。これらと向き合いながら、平野は今、被爆2世を生きている。



6月19日夕、外で打ち合わせを終えた平野が市内の事務所に戻り、記者の取材を受けていると、今度は事務所の電話が鳴った。高校生平和大使の選考に関する埼玉の人からの問い合わせという。記者が「休む暇はなさそうですね」と投げ掛けると、笑ってうなずいた。

(文中敬称略)



【継続】 「最後まで」教え胸に「反核9の日座り込み」に参加し続けている平野さん(前列中央)
=6月9日、長崎市、平和公園

=おわり=